

『街の自然観察』

矢野 亮 著 筑摩書房



観察とは目の前にあるものを注意深く見ることだと思っていたが、場所や時間を広げて見ていくことで様々なものがわかってくる。例えばシジュウカラがさえずった場所や雄同士のけんかをしていた場所を地図に書入れ、線でつなぐ

となわばりの範囲がわかる。時間を広げて調べると、なわばりの広さや数に変化していることがある。それによってその地域の自然の状態の変化が示されるということや、セミの抜け殻を集め、1週間ごとに調べるとセミの種類や出てくる時期でその年の天候がある程度わかるということが書かれている。一つずつの事柄を積み重ねて、一般的なことにたどりつく科学的方法はこういうことでなされるのだと納得した。

西緑地は街に近いところにあるが街ではない。そこでは木、草やそれらに集まる虫、鳥が姿を

みせる。30年以上前に書かれた本なので現在ではここに書かれたものの内の幾つが街といわれる場所で見られるだろうか。西緑地のような場所のほかに自然観察を楽しめる場所としての街はあるだろうか。

この本では春の福寿草、タンポポのように好きな人が多いだろうものから冬のムカデ、ヤスデやハエなど「うわー！いやだ」という声が聞こえてくるものまで四季それぞれに特徴的なものを観察する視点を教えてくれる。中高生向けに書かれたもので読みやすく、見つけたものの名前を調べるのに便利な表が幾つかのものについて載っている。冬なら「土の中の虫」「木の顔」と「雑木林の木の肌」という具合。葉や実を使った工作も椿の葉の虫かごやカラスウリのちょうちんなどが紹介されていて作ってみたいくなる。

(宇野)